

会計大学院への縁と想い

青山学院大学名誉教授・弁護士

重 田 晴 生

本年4月をもって青山学院大学大学院会計プロフェッション研究科が創立10周年を迎えるとのこと、当初から他の14名の研究教員、実務家教員と共に専任教員として名を連ねた者として感慨無量、一昔のこととて、当時のことが今もはっきりと懐かしく思い起こされる。

2005年に開設ということは、私ども専任スタッフとしては前年の夏休み前から開学に向け準備作業を開始しており、研究科の具体的な組織作りから入試関係まで諸事万端を校内の空き部屋を転々としながら頻繁に会議を開き粛々と進めた。そして同年11月末、文部科学省から正式の設置認可が下付された数日後には、首尾よく研究科の最終入試説明会も終えて、あとは応募の成り行きを待つのみであった。幸い、80名定員につき志願者は、社会人入試と一般入試を合わせて190余名と2倍強となり、翌年明けの入学試験を経て、3月初めに判定教授会を開催した。続いて同3月末、会計専門職新校舎（16号館）が完成して厳かに献堂式典が執り行なわれた。4月に入るや入学式、新入生ガイダンス、歓迎懇親会と、慌ただしくも華々しい日が続き、喜びと共に、いよいよこれからだと決意を新たにした。

ところで、2000年4月に本学法学部に就任した私は、着任してわずか4年目、漸く新任地の状況が大体分かり、少し腰が落ち着いたかという時に、会計専門職大学院という学際的ながらこれまで縁が薄かった学問分野に専任教員として張り付くことになり、法学部（同大学院）の教員もそのまま兼務するという本学就任時には思いもしない転身であった。そればかりか、会計大学院開設の前年（2004年）には、法学教育・法曹の大改革という時代の流れを受け、本学にも法科大学院（ロー・スクール）が開設されたのに伴い、そこでの講義科目担当と入試業務に係わり、さらには、会計大学院と同時並行して古巣の大学院法学研究科の改革構想が急浮上した結果、社会人向け夜間コースのビジネス法務専攻科を増設することになり、私は当初準備室長を務めたりと、この頃の数年は多忙を極めた。

さて、いよいよ会計プロフェッション研究科の新学期がスタートし、私は差し当たり演習と講義2科目の授業担当となったが、会計・監査領域における最高レベルの教授陣容を揃え、会計のプロを育成し、研究と理論を融合した教育を実践するという教育理念を挙げ発足した本研究科の下で、私は、会計とは畑違いの自分が担う役割は何か、それを効率的に実践するために必要な技法は何か有るのかとか、多少不明解で不安がなくもなかったが、上記のような創設経緯の中では目前の問題をこなすのに精一杯で、深く考え込む暇などなく、ともかく自分は、今日まで長年にわたり培ってきた専門の研究と教育経験のすべてを投入し、また、

すでにここに移籍する前から6年間ほど弁護士業に携わり、またそれ以上長く上場会社の監査役の仕事も務めて、多少ながら企業社会と係ってきた中で体得した実務経験をもって当たれば何も問題はあまいと思量した。

会計大学院の学生については、私が担当した企業法科目でいえば、演習、講義とも小人数で、うち社会人が半数と、法科大学院のクラスと大体同じだが、法学部出身者の割合となると、一般学生、社会人学生含め法科大学院の場合は大方がそれで法曹家を強く志向する学生一色であるのに対し、会計大学院の方は、法律科目を学んだことのある学生は極く僅かで、さらに内訳すると、会計士、税理士の資格取得を目指す中で、広くより深い知識を身に付けようとの志と熱意を持つ少数学生と、人生思うところあってか一念発起し、自身のキャリアアップ、キャリアチェンジとの思いで履修した学生が混在するクラスの授業であった。このことは別に想定外ではなく、学部専門ゼミであっても、また他の大学院のクラスの場合でも、大同小異であったから、私はここでの教育の方針としては、受講生にはまず基礎的法律知識を習得させるため身近な具体例や直近の新聞・雑誌記事等を織り込む教授法により、実は法律という学問が各人が現在身を置く一般市民社会ないし企業社会とどれほど密接に関連し有用なものかを意識させ、法を感じ取る感覚、感性（リーガル・マインド、リーガルセンス）を習得できるよう心掛け、教室でも実践した。このことは、教員として、また学生にとっても努力と忍耐を要することであったが、さすがは大人の院生、暫く経つと段々と主体的、積極的な学習意欲が認められ、教室でのプレゼンテーション能力も高まって、目指す授業のかたちが出来てきた。

いつも思うことだが、教育という職業に身をおく者として最大の喜びは、学生の成長である。言わずがな、われわれ大学教員は毎回の授業を通し教育に全精力を傾注し、また授業外では常に心を開きコミュニケーションをとって、人間的な信頼関係を築くよう努め、学生のもつ潜在能力を掘り起こし、時代を担う有為な人材を養成して社会に送り出すことに尽きる。特に専門職大学院の学生達は、新世紀とともに日本の経済社会、教育社会が大きく変貌する渦中で、いまいちど自分自身を見つめ直し、複線的キャリアを取得して、新しいライフスタイルを確立したいとの熱く真摯な思いで、さらなる勉学をと決断したであろうことに思い致せば、それをしっかり受けとめて最大限応えることが教員の使命であり、責務であると考える。

創立10周年という節目の年、専任教員はもとより、兼任・兼担のすべての教員は、初心に戻り、本研究科の教育の徹底と教育環境のさらなる整備に努め、数ある会計大学院に伍して、青山学院の会計大学院が一段と大きく光り輝くことを心より願い、期待するものである。

最後に、同僚の専任教授の方々に一言感謝をささげたい。私の会計大学院在任期間は、準備期間を入れて6年程、短い間であったが、会計・監査・税務分野で一流の諸先生と出会い、心豊かな親交ができ、豊富な教えを戴けたことは、私の人生の宝であり、この間の数々の思い出と合せて終生忘れることはない。皆さんの益々のご活躍、ご健勝を祈念しつつ筆を置く。